

10 参加の促進

教科教育の中で培われてきた「わかる授業」の工夫の中には、ユニバーサルデザインの視点が多く含まれています。

学習活動を活発にし、授業への参加を促進するには、①学習へのモチベーションを高めること、②間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べること、③多様な学習スタイルがあること、④学習のポイントをつかめる教材の工夫、⑤参加のための支援・援助などがあります。

1 学習へのモチベーションを高める

いうまでもなく主体的な学びには、児童生徒の学習へのモチベーションを高めることが重要です。それには、①児童生徒の既存の知識や体験、興味・関心を活かす、②目的やめあてが明確であること、③自分との関連性や価値を実感できる課題の設定などが大切です。

(1) 児童生徒の興味・関心を活かす

児童生徒の既存の知識や体験、興味を活かして教材化することで児童生徒は意欲的に学習に参加できます。

小学校6年の算数「場合の数」の授業です(図10-1)。修学旅行の鎌倉でのグループ行動を思い起こさせ、問題を設定しました。学習意欲と思考に具体性を持たせる工夫の一つです。

【問題】

鎌倉の鶴岡八幡宮、建長寺、銭洗弁財天、大仏の4カ所を見学します。

見学する順序は、全部で何通りありますか。

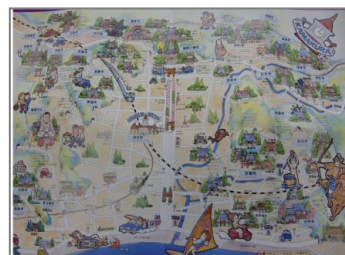


図10-1「修学旅行を題材にした算数の教材」

(2) 目的や「めあて」の明確化

児童生徒が「活動や学習の意図」を十分に理解した上で参加できるようにします。図10-2は、小学校での「学級会」の授業です。掲示物を活用し、目的やめあてが分かりやすく示しています。



課題	クラスのアルバムを作ろう
めあて	楽しかったことやがんばったことを思い出して話し合おう。
決まっていること	・クラスで1さつ作る。 ・8ページ作る。はんごとに1ページ。
話し合うこと	どんな中身にするか。

図10-2「目的やめあてが明確な授業」

(3) 自分との関連性や価値を実感できる課題の設定

学習する内容が自分にとって「関係がある」「身近だ」「役立つ」と実感できると、児童生徒は積極的に学習に取り組みます。

2 間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べること

(1) 「おしえてカード」「ヒントカード」の活用 (小学校)



表 10-3 「カードの活用」

授業中は、児童生徒にとって様々な疑問や「分からないこと」があります。質問したくてもできない児童生徒もいます。そこで、全員に「おしえてカード」と「ヒントカード」を持たせます (表 10-3)。

カードがあることで、分からない時には教えてもらえるという**安心感**が生まれ、**不安を軽減**することができます。

また、気になることがあった時に、カードを置くことで席を離れて調べることができるので、じっとして学習することが苦手な児童には適した支援です。

カードの種類	使い方
おしえてカード おしえて!	分からなくて教えてもらいたい時に机の上に置きます。 先生や教えたい友だちがすぐに教えてくれます。
ヒントカード ヒント!	自分で調べたい時に机の上におきます。 教室後方のヒントコーナーで調べることができます。

(2) 「お助けシート」「ヒントシート」

既に学習した内容を忘れてしまい、次のステップに進めない児童生徒は、少なくありません。

そこで、公式などの既習事項を忘れてしまった時、自分から確かめられるように「ヒントシート」を用意します。必要な児童生徒は誰でも使ってよいことにします。

学習の遅れがちな児童生徒にとっては、ヒントシートを見ながら、繰り返し取り組めるので学習の定着を図ることができます (図 10-4、図 10-5)。

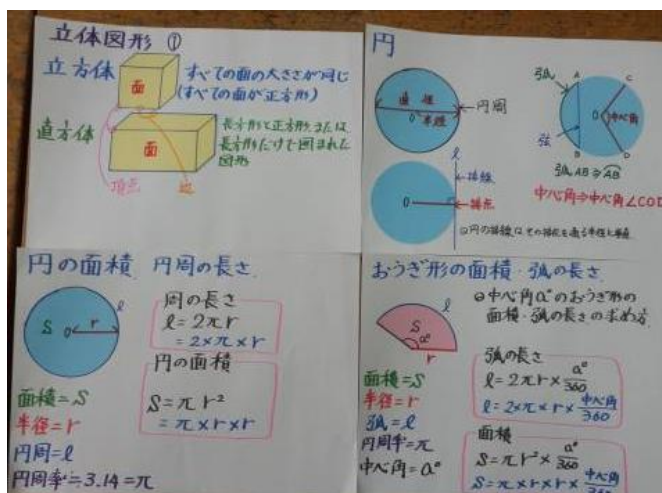


図 10-4 数学「面積と体積の求め方」

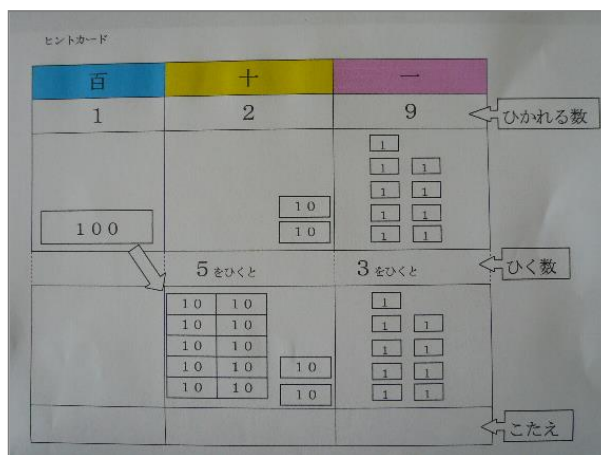
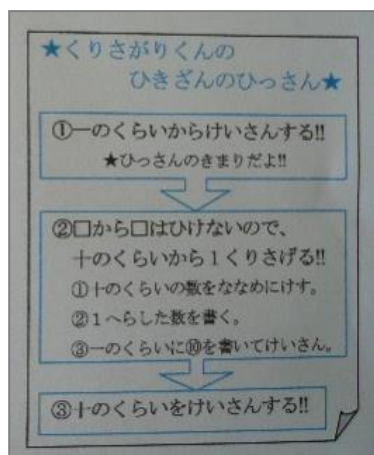


図 10-5 ヒントシート「算数：繰り下がりのある筆算」

3 多様な学習スタイル

児童生徒の個性は、様々であるように、学びのスタイルも様々です。教師からの一方的で画一的な指導にならないように、多様な学習スタイルを状況に応じて活用できるようにしたいものです。ワンウェイ・コミュニケーションではなく、ツーウェイ・コミュニケーションを心掛けましょう。

ここでは、集団の形態別による学習スタイルについて取り上げます。

(1) 机間指導 ～一斉指導と個別指導の組み合わせ～

机間指導は、児童生徒個々の学習状況を確認し、個に応じて指導・助言できる重要な機会です。個々への指導が適時できるように、つまづきが予想される課題に対して個別教材や支援グッズを準備しておくことが大切です。

(2) 学び合い ～ペア学習、グループ学習～

2人一組のペア学習、班ごとのグループ学習、グループ学習を組み合わせた協調学習など、児童生徒同士の学び合いを適切に組み入れることで授業にメリハリが生まれるとともに、考える力や伝える力を高めあうことができます。

また、一斉指導の授業スタイルの中では児童生徒個人ではなかなか自覚しにくい「間違い」や「分からなかったこと」への気づき、正解に向けての「発見」が得られることも期待できます。



座席は、2人一組で並んでおり、例題の答え合わせなど、生徒同士がペアになって学ぶ機会を普段の授業の中に取り入れている。

図 10-5 ペア学習「高：古典」

<ユニバーサルデザインの視点>

「②多様な学び方に対し柔軟に対応できる授業」

「④欲しい情報がわかりやすく提供される授業」

「⑤間違いや失敗が許容され、試行錯誤をしながら学べる授業」

→この項目は、授業UDの7原則の全ての要素が含まれます。特に②④⑤の視点での工夫が望まれます。

4 教材教具の工夫

教科の指導目標を達成するために様々な教材教具が工夫されています。それらは、児童生徒にとって学ぶポイントや重要な事項を具体的に分かりやすく教えてくれるものです。

(1) プリント教材「作文の書き方」

作文の書き方の指導でもたくさんの指導項目があります。それらを分かりやすく整理、構造化したワークシート(①~③)に沿って学習を進めていきます。

- ① 作文指導1「誤りやすい表現に留意する」
- ② 作文指導2「文章の構成を考える」
 - ・起承転結の構成、三段落構成の意見文
- ③ 作文指導3「いろいろ表現方法を考える」
 - ・語順や使う言葉の工夫、文末表現の工夫

作文指導1

○誤りやすい表現に留意する

○文末表現(名詞・動詞)が統一されていない。

○主語・述語が対応していない。

○係り受けの関係が乱れている。

問

次の文を適正な形に改めなさい。

①わたしは「の巻を見て」二つのイロを感じた。「一」は、最近新聞を読む人が減ってきているのでいいです。もう一つは、若い人は新聞を読まなくなっているからだ。

②わたしがこの本を読んだ感じが、主人公はでも勇気があると思いました。

③僕の進んでいくのは、自分の思い通りにいかないけど、でもまあいいと思っています。

④わたしは思った、彼女はもう少し少しい人の意見を素直に聞いたほうがいいと思います。

⑤

⑥

問

次の文は、長すぎるためわかりにくくなっています。

① 主語と述語の関係が一つ一つの短い文に区切ってきましょう。

② 区切った文のうち、結びが自然なと思われる文は、書き手工夫して続け、全体として整った文章にしましょう。

先日、成人式が行われましたが、成人式は新成人を祝う式であるとともに成人であることの責任を自覚させるための式であるにもかかわらず、最近の一部の新成人の人たちが、周囲の迷惑を顧みず暴れるなどして、自分たちのための式を自分たちで壊してしまっているようなので、さうどう大人たちは、自分たちの立場を自覚してほしいし責任ある行動をとりたしてほしいと思います。

一つの文はなるべく短く！

図 10-6 自作教材「作文の書き方」

(2) 手本や補助具の活用(中:技術)

材料にのぎりで切る線を書いたり、釘やねじ穴の中心に印をつけたりする作業を「けがき」といいます。ミリ単位の精密な作業なので生徒にとって不安があります。

そこで厚紙で作った「型紙」を補助具として用意しておきます。「型紙」は、材料にきちんと合わせれば間違えずに「けがき」の線が引けます。

活用のポイントは、あくまでも、さしがねの使い方の技能を身に付けさせることが目標です。そのことを踏まえた上で補助具を活用します。自力のできる生徒は、確認のために活用します。

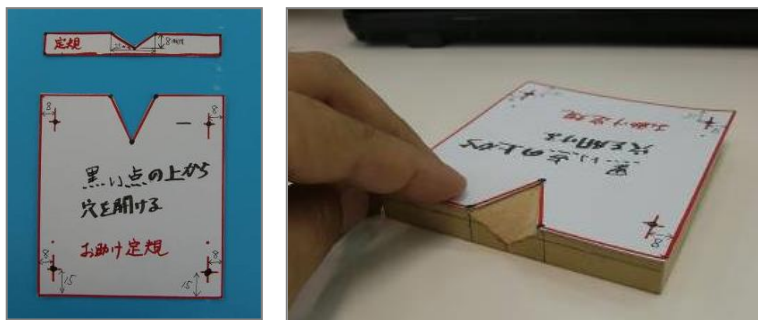


図 10-7 補助具「型紙」

5 テストへの取組

(1) 解答用紙の工夫

中学校の定期試験になると、問題用紙と解答用紙が別々の形式になることがほとんどです。

目の動きが滑らかでなかったり不注意の傾向があったりする児童生徒は、問題と解答の欄の配列が異なっていると、解答の記入がズレてしまう場合があります（図10-8）。

正答が分かっているが、得点に反映されないのです。

問題用紙と解答用紙は、空間的に対応させるとケアレスミスを防ぎます。

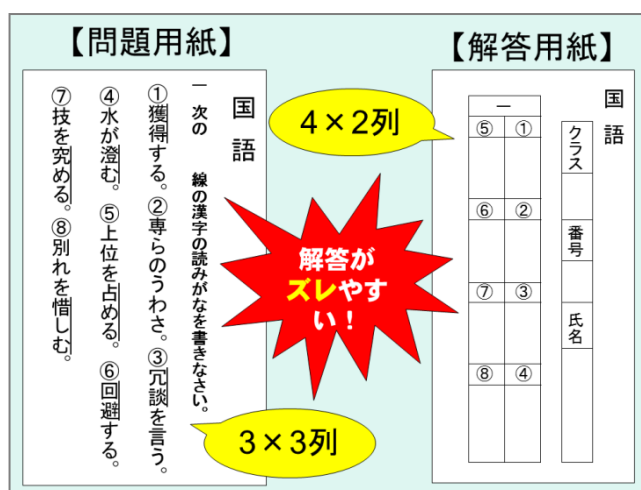


図10-8「問題用紙と解答用紙の様式をそろえる」

(2) うっかりミスを防ぐ「受け方マニュアル」

うっかりミスが多い、テスト中に気が散って集中できない、時間配分が上手くできずにやり残してしまうなどの理由で、学力はありながら、実力が発揮できない生徒がいます。

そこで、要領の良いテストの受け方を身に付け、ミスを起こしやすい自分の癖を知り、同じ間違いを繰り返さないために「テストの受け方マニュアル（図10-9）」を活用するとよいでしょう。

テストの受け方マニュアル

- ① 配られたらまず、名前を書く。
- ② 問題用紙の枚数、解答用紙、裏面がないか確認する。
- ③ 問題を最初から最後までひと通り見て、全体の量と概要をつかむ。
- ④ できる問題、分かりそうな問題から始める（分からない問題は後回し）。
- ⑤ 問題の番号と解答用紙の番号を照らし合わせる。
- ⑥ 記号問題は、すべて答える。
- ⑦ 選択問題は、いくつ選ぶのか確認する。
- ⑧ 途中で残り時間を確かめる。
- ⑨ 最後までできたら、見直しは2回行う。

（「名前の記入」「解答欄のズレ」「問われていることに対応しているか」）

図10-9「テストの受け方マニュアル」

～ 大学入試センター試験 身体障害者等に係る受験特別措置 ～

大学入試センター試験では、受験に際して、障害等のために特別な措置を希望する志願者に対して、申請に基づき、審査の上、受験特別措置を行っています。

平成23年度から「発達障害」もその対象に加わりました。措置事項として、①試験時間の延長（1.3倍）、②チェック解答、③拡大文字、④注意事項等の文書による伝達、⑤別室の設定、⑥リスニングにおけるヘッドホンの使用等があります。

いずれも、継続的な学習への参加を保障する必要不可欠な支援や配慮です。



応用・発展

～特別支援学級や特別支援学校での活用例～

1 自己選択・自己決定の場面を積極的に取り入れる

知的障害のある児童生徒の教育では、学習のモチベーションを高める工夫を凝らします。受身になりがちな学習に臨む姿勢をより主体的なものにするための工夫として、「自分で選び、自分で決める」とことと「体験を通して考える」を指導に取り入れています。

図 10-10 は、生活単元学習「デザートを作ろう！」の単元最初の授業の様子です。何を作るのか決めるところから、自己選択・自己決定を取り入れています。まず教師が用意した10種類のデザートを試食し、自分の作りたいデザートを選び、自分達で決めました。

最初に具体的な「できあがり」が分かることで、目標と意欲を持って学習に取り組むことができます。



図 10-10 「作りたいデザートを選ぶ」

2 コミュニケーション・カード

言葉による理解や表出が難しい児童生徒のコミュニケーションを促進するために、このカードを使います。このカードは、児童生徒の日常生活に基づいて様々なカードを作成し、児童生徒の言葉の理解と意思の発信のために利用します。

写真は、単語レベルですが、担任の名前(顔)や物に関するものなどを作成することで、二語文、三語文になります。



図 10-11 「様々なコミュニケーション・カード」

<特別な教育的支援を必要とする児童生徒への効果>

自閉症のある児童生徒の中には、不安のない状況でも突然不安に陥りやすいことがあります。そんな時に、すぐに支援を求められ手助けしてもらえるHELPカードがあると安心できます。更に、間違いが許される学級は居心地のよい学級となり落ち着いて授業に参加できるようになります。

自閉症のある児童生徒は、特定分野に強い興味があり知識が豊富な場合があります。また、ADHD(注意欠陥多動性障害)の児童生徒は、好きなことに集中し続ける特性があります。これらの児童生徒の興味や好きなことを授業の導入に取り入れることは学習意欲が高まり、力を最大限に発揮してくれます。

話したり聞いたりすることが苦手なLD(学習障害)の児童生徒は、伝える相手を誰にすればよいかわからないことがあります。そんな時に、ペア学習やグループ学習を取り入れると、伝える相手を意識しやすくなります。また、相手から自分に向けられていると意識しやすいくことから学習理解を深めることになります。